

双系的親族組織におけるイトコ婚の一考察

前 田 成 文*

Marriage with Near-Kin in a Malay Village, Melaka

by

Narifumi MAEDA

The general thesis of this paper discusses two points: (1) why the Malays prefer marriage to near-kinsmen and (2) under what conditions an endogamous pattern of mate selection appears in a community. Data are supplied from the field work in a Malay village near Melaka Town in 1971/72.

Factors involved in the first point: Parents, especially mothers, have a strong voice in marriage negotiations, although in villages with a cash economy, such as this one, youngsters usually have a greater say in mate selection. The mothers do not explore the field of eligible mates very widely. Rather than social standing and economic status, the Malay principles of mate selection stress the idea of *jodoh* (fitness), the ties of *saudara* (relatives) and residential and psychological propinquity. These are firmly embedded in Malay attitudes, thus reinforcing dyadic equilibrium relationships which serve to minimize their fears against the unknown and to secure their identity through ties with relatives and through assortative matings.

Factors involved in the second point: The Buginese heritage and the low divorce rate contribute to the acceleration of a stronger endogamous pattern of mate selection. Furthermore, if the population groupings are small and the settlement is rather isolated, I hypothesize that a greater likelihood of previous kinship ties between married couples owing to residential propinquity will prevail.

I 序

I. 1. 本稿¹⁾はマレーシアにおける一農村の配偶者選択におけるイトコ婚と村内婚との高い出

* 京都大学東南アジア研究センター

1) 1972年10月19日の東南アジア研究センター研究例会において発表した「通婚範囲と家族圏——マラカール農村における配偶者選択を中心として」の比較資料を若干補って書き改めたものである。研究例会において貴重なコメントを頂いた築島謙三・甲田和衛教授、ならびにマレーシア・プロジェクトの共同研究者として常に刺激を与えていただいている口羽益生、坪内良博、滝沢英夫の各氏に改めて感謝の意を表したい。とくに坪内氏には草稿を読む労をとっていただいた。いずれも有益なコメントをいただきながら十分生かし切れなかった。

現度数に関する考察である。この考察を通じてマレー人の生活を支配する原理を掴む手掛りとしたい。部分の中に全体の原理を見出そうとする試みである。このような積み重ねの上に全体からの部分の説明が初めて可能となる。全体の構想から見れば、本稿は一研究ノートにすぎない。しかし、他面、イトコ婚そのものの理解に対する人類学的寄与という意味では、本稿は独立の論文でもある。

データは1971年6月より1972年6月まで1年間にわたるマラカ(Melaka)州プルヌー(Pernu)区 BP 村における筆者の調査²⁾に基づくものである。以下、第Ⅰ節において調査村の背景をごく概略的に述べ、第Ⅱ節で調査村のデータを提示する。第Ⅲ節において若干の検討を加えたのち、第Ⅳ節において比較検討のため文献を渉猟し、第Ⅴ節で結論をのべる。

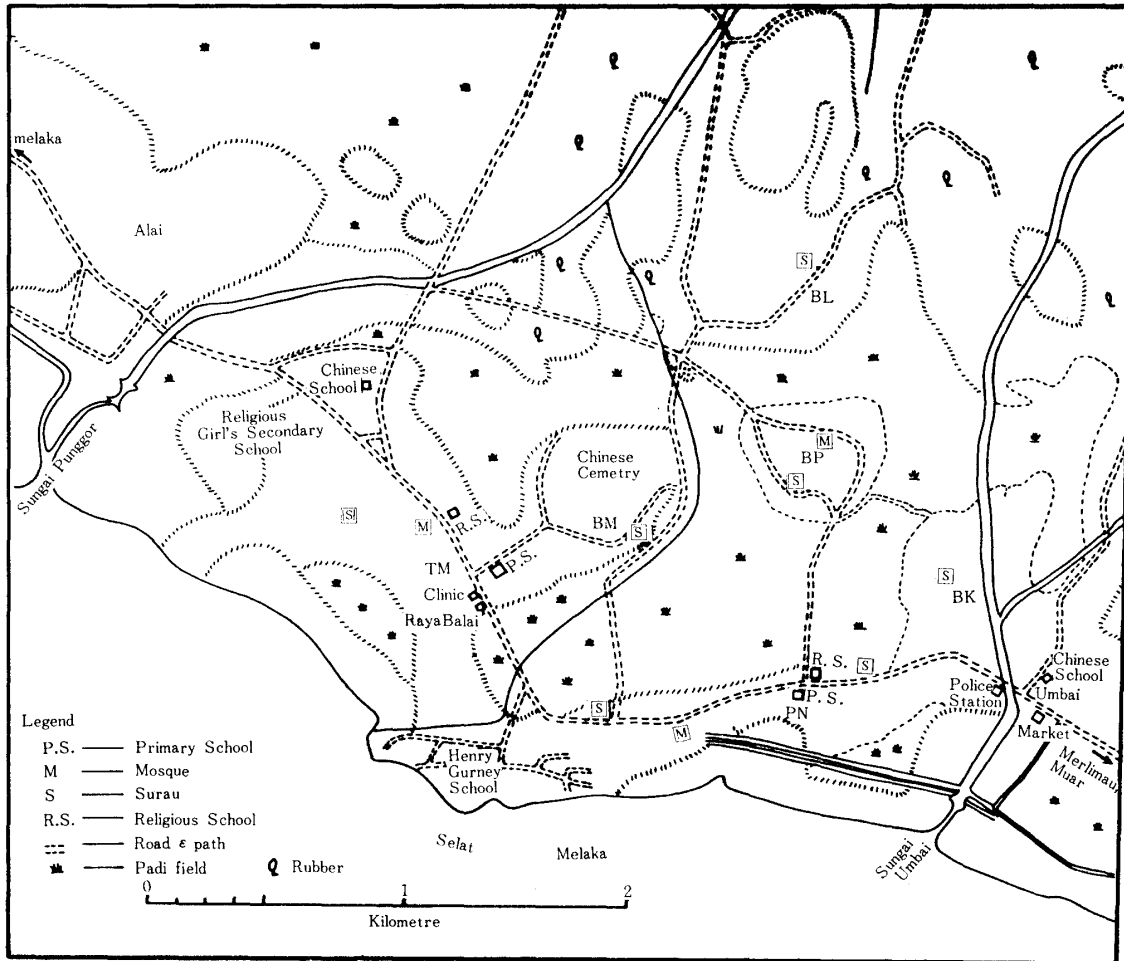
I. 2. 調査村 BP 村はマレー半島西海岸のマラカとムアル (Muar) とを繋ぐ幹線道路のマラカより 12km 行った地点から約 1km 弱離れた所に位置している。海岸線からは約 2km 離れている。集落形態は水田の中にボツンと島のように浮かんだ塊村である (Map 1 参照)。家や果樹園のある集落区域は約 54.5 エーカー (≒22.1 ha) である。土地台帳の上では 68 区画に分けられていて、その内 8 区画には家が建っていない。1 区画の平均面積は 0.8 エーカー (≒32.4 a) である。家の数は 90 軒 (1971 年 9 月現在) あり、その他に小さな小売雑貨店、モスク (回教寺院)、スラウ (surau, 回教礼拝堂)、コミュニティーホール (ただし Bilek Bachaan と名付けられている)、ゴム汁液処理場がある。(Map 2 参照)。筆者滞在中に新しく 3 軒の家が完成し、他に 4 軒の家が建築中であった。

BP 村の世帯 (同居して家計を共同にする単位) の数は 89 である。この内、老齢・難聴で少し気のおかしい婦人が 1 人で住む 2 世帯と、両親が亡くなり兄弟が他出している婚前の女性 1 人の 1 世帯との計 3 世帯は面接調査不能に終わった。第 1 回面接調査後 BP 村に帰村してきた 2 世帯の婚姻に関するデータも本稿においては含まれている。

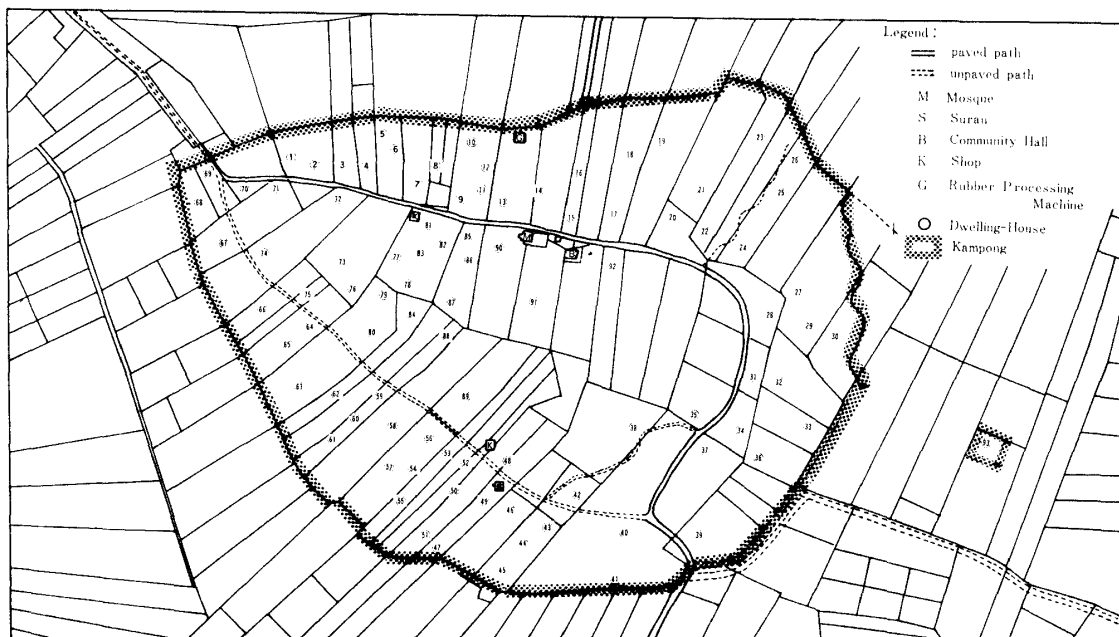
I. 3. BP 村の主たる生業は稲作とゴム栽培と出稼ぎ労働である。稲作はすべて自家消費の為のみである。61 世帯が水田を所有する。平均水田所有面積は約 1 エーカー (≒40 a) である。³⁾ 水田を自分で耕作している世帯は 49 世帯で、耕作面積の平均は約 1.6 エーカー (≒65 a) であ

2) 東南アジア研究センターのマレーシア・プロジェクトの一環として行なわれ、東南アジア研究センターから調査費が支給された。センター所長市村真一教授およびプロジェクト・リーダー川口桂三郎教授に対し厚く御礼申し上げる。プロジェクトに参加された故富士岡義一、西尾敏彦、古川久雄の各氏および前注 3 名の方々には現地でそれぞれ専門的な立場からお教えを頂いた。プロジェクトのマレーシア側のパートナーであるマラヤ大学副総長 Ungku Abdul Aziz, 同経済学部長 Mokhzani bin A. Rahim の両氏には調査全体に関する示唆・お世話をいただいた。マラカ州では州総理(当時) Hj Talif bin Kamin, 郡長(D. O.) Kamaruddin, 州議会議員 Hj Abdul Hadi bin Abas および区長(Penghulu) Hj Bokhari bin Hj Said の各氏をはじめとして多くの人の御配慮によって調査をつつがなく進めることができた。その他終始調査に御協力いただいた BP 村の方々にも誌上をかりて感謝の意を表したい。

3) 調査村付近の平均収量は、1972年度の農業局の Crop-Cutting Test によると 1 エーカー当り 380 ガンタンである。1 ガンタン=1 英ガロン。



Map 1



Map 2

る。この経営面積からも推定されるように、村全体として米の自給にはほど遠く、米を1年間購入せずにはすむ世帯は16.8%にすぎない。端的に言えば、稲作のみでは生計が立てられないほど土地が少ないのである。この為ゴムの栽培や出稼ぎによって現金収入の道を求めなければならない状態にある。

しかしながら、ゴム栽培も小規模経営であり、その上に最近のゴム価の低下によって十分な現金収入をもたらさない（ゴム園所有世帯34，平均所有面積5.57エーカー）。10代，20代の青年層の多くはゴム採液の仕方を知らない。かわりに，大都市の親戚を頼って職を探しに出る。工場労働者，役所の使い走り，店員などの雑役的な職が多い。壮年層の出稼ぎ経験の多くは，船員，仲仕，警察官，灯台守り，兵隊，ゴム採液労働者などである。戦後顕著に見られるのは現オーストラリア領クリスマス島への出稼ぎである。同島での燐鉱採掘労働に従事する。BP村現世帯の中から同島へ出稼ぎに行っているのは14人を数える。20～30代の婚前および婚後10年くらいまでの青年が家族員を村に残して単身出稼ぎに行っているのが大部分である。なかには，BP村出身でクリスマス島で結婚し，そのまま同島に20年以上も住みつきながら，BP村周辺のゴム園を買い続けて老年には帰村してこようとしている者もある。

I. 4. 一時的出稼ぎ者（家族員をBP村に残していて，帰村の意志の明らかな者），寮にいる生徒，未婚者で一時的に都会に出ている者などをも含めたBP村の人口構成はTable 1に示

Table 1 Population by Age and Sex
(as of Oct. 1971)

Age	Male	Female	Total
0—4	25	19	44
5—9	31	40	71
10—14	43	44	87
15—19	33	36	69
20—24	20	22	42
25—29	12	12	24
30—34	7	6	13
35—39	6	15	21
40—44	9	9	18
45—49	11	14	25
50—54	8	6	14
55—59	5	9	14
60—64	7	8	15
65—69	4	6	10
70—74	2	5	7
75—79		1	1
80—84		3	3
85—89	1	1	2
Total	224	256	480

され、人口ピラミッドにすれば Fig. 1 のごとくなる。中年層において男女ともに減少の傾向が見られるのは、安定した職を得た者が村に残っていた家族員を呼んで一緒に生活するからであろう。しかし、停年退職したり、離職したりすると村に帰ってくる。そこで改めて職を探したり、生計のたつきを求めたりする。

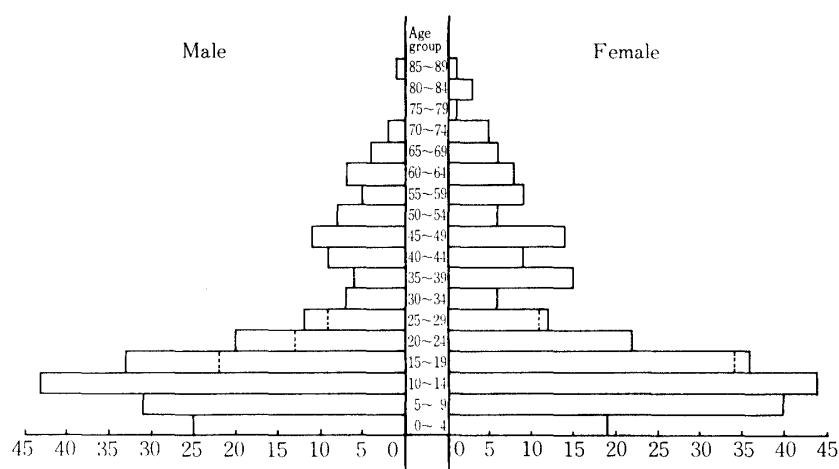


Fig. 1 Age Pyramid by Sex (as of Oct. 1971)

15～24才の男子の約1/4は、未婚者の一時的離村のカテゴリーに含まれる。彼らは、いわば村から飛ばされている風のようなものである。風のまにまに流される風のように、彼らも一定の企图を持たず都会の中を流されるままに過ごしていく。何かの拍子に糸が切れて、永久的な離村者となることもあり得る。しかし、彼らが都会にいる出稼ぎ世代である親族の周りをウロウロしている限り、完全な離村という挙に出る可能性は少ない。風を結ぶ糸は意外に強い。切れた様に見えてもやはり繋がっているものである。BP 村の人口膨脹はそのような帰巢習性によるものであるとも言える。

II 資 料

II. 1. 配偶者選択に際して、前もって定められた属性によって相手を選ぶということは一般に

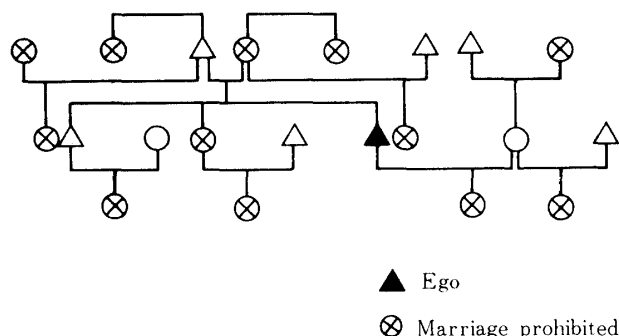


Fig. 2 Marriage Prohibition in the Muslim Law

規範化されていない。イスラーム法による婚姻禁止の範囲以外は配偶者選択はまったく自由であるというのがたてまえである。イスラーム法における「近親婚」の禁止範囲を念の為に図示しておく (Fig. 2)。同世代親では「きょうだい」を除いてすべてのイトコと結婚可能ながわかる。

II. 2. 特定の親族との婚姻を規定する掟も、親族内で結婚すべしという明言化された決まりもないにもかかわらず、BP 村においては第1イトコ婚、第2イトコ婚の出現頻度数は極めて高い。頻度数が高いというのは、他のマレー人コミュニティに比較してということである。

現在 BP 村に住む婚姻経験者の過去の婚姻ケースおよび現在の夫婦を各々1ケースと数えて集計した結婚数のうち、配偶者との関係が不明なもの(2ケース)を除いた127ケースの親族関係を分析したものが Table 2 である。第1イトコ婚の中に「母の妹の夫が彼の前配偶者との間に儲けた娘」(MZHD)⁴⁾との結婚2ケースも含めた。血縁上は無関係であるが、HMZ と WF とが結婚していることによって義理の第1イトコと同等に扱われる。第2イトコ婚の中には異世代婚(第1イトコの娘または父の第1イトコとの結婚)も含めた。マレー流の数え方によれば、sepupu⁵⁾ではなく dua pupu に数えられると考えたからである。尊属親の詳しい間柄

Table 2 Kin Category of Wives (BP)

First-cousin	MBD	8	
	MZD	9	
	MZHD	2	
	FBD	1	
	FZD	3	
	Total		23
Second-cousin	MMZDD	1	
	MMBDD	1	
	MMZSD	1	
	MZDD	2	
	MFBDD	1	
	FFBSD	2	
	FMZDD	2	
	FFBD	1	
	unknown	3	
	Total		15
Distantly related			16
Non-kin			73
Total			127

(Note : All marriage experiences were counted.)

4) M=母; Z=姉または妹; H=夫; D=娘, MZD は mother's sister's daughter と読む。以下次の略号を加えて同様に親族関係を表わす。F=父; B=兄または弟; S=息子; W=妻

5) se- および dua は数詞の1と2にあたる。pupu は筆者がオラン・フルに関して試みた定義がマレー人の場合にもそのままあてはまると考える。「尊属の世代におけるあるきょうだい関係を基線として、その基線からの世代の遠さによって計算される傍系血族の親等」である。(拙稿「ジャクンの親族名称」『東南アジア研究』第4巻第5号 p. 844。)

は不明であるが第2イトコに間違いないというのもこの中に数えてある。第3イトコおよび第4イトコ間の結婚に関しては詳しい関係の追跡はできなかった。これらは「遠い親類」(saudara jauh, bau bachang)の中に一括して含ませた。非親族婚はだいたい解答者が親族関係がないというのを額面通り受けとっているが、なかには他のデータを勘考して明らかに親族関係がたどられるケースもあったので、それらは該当カテゴリーの中に含めた。表では便宜上解答者が女性であっても、人類学の慣行に従って男のほうから関係をたどっている。

全結婚歴数を含めたということは、もし離婚が近親間結婚者より非親族と結婚した者の間に繰り返されるならば、非親族間結婚回数を多くするという偏りを生み得る。しかし、BP村では離婚ケースが少ないので無視した。

II. 3. 婚姻締結の際に重要な関心事になる一つは婚資金の額である。婚資金の額は当事者の家庭のコミュニティにおける地位を示すものとしてできるだけ高額が娘側からは要求される。双方の相互的な駆け引きと譲り合いで、コミュニティの中で他人から見ても適当だと思われる額に落ち着くのが普通である。しかし娘側が男側を不満とする場合には高額な婚資金の要求によって間接的に男側の申し出を断わることもできる。最近の一般農民の間での婚資金はだいたい200ドル⁶⁾から400ドルが普通だとされている。

Table 3 は第1イトコ婚のみの婚姻締結年別婚資金額である。Table 4 は第1および第2イトコ即ち近親のカテゴリーに入る者の婚姻であり、Table 5 は遠い親類同志の結婚をも含めた親族婚で、Table 6 は親族でない者同志の婚姻である。婚資金の場合、社会的な意義を有するのは娘の初婚の場合であるので、Table 3-6 の婚資金額のケースの中に女性の再婚は含まれていない。婚資金の額は解答者の解答のままでクロス・チェックはされていない。若干の思い違い、記憶喪失などによる誤差はあろうが、ほぼ本当のことを言っていると思われる。なぜならば婚資金額はコミュニティ内部では周知の事柄になるので、嘘を言えば簡単に他の者に指摘され

Table 3 Bride-Price for First-Cousin Marriage

year	M\$	$\alpha \leq 100$	$100 < \alpha \leq 200$	$200 < \alpha \leq 300$	$300 < \alpha \leq 400$	$400 < \alpha \leq 500$	$500 < \alpha$	DK	Total	Average Bride-Price
~1921				1		1		3	5	400
1922~1931		1	5						6	167
1932~1941		1	1						2	100
1942~1945				1					1	300
1946~1955			2			1		2	5	300
1956~1965			1	2					3	250
1966~1971					1				1	400
DK								1	1	
Total		2	9	4	1	2		6	24	M\$ 242

6) マレーシア・ドルである。1ドル=100円。

Table 4 Bride-Price for Near-Kin Marriage

year	M\$	$\alpha \leq 100$	$100 < \alpha \leq 200$	$200 < \alpha \leq 300$	$300 < \alpha \leq 400$	$400 < \alpha \leq 500$	$500 < \alpha$	DK	Total	Average Bride-Price
~1921				1		1		3	5	400
1922~1931		1	6	1					8	181
1932~1941		3	2					1	6	110
1942~1945				1	1				2	350
1946~1955			4			1		2	7	250
1956~1965			1	2	1				4	288
1966~1971				1	1	1			3	383
DK								1	1	
Total		4	13	6	3	3		7	36	M\$ 243

Table 5 Bride-Price for Kin Marriage

year	M\$	$\alpha \leq 100$	$100 < \alpha \leq 200$	$200 < \alpha \leq 300$	$300 < \alpha \leq 400$	$400 < \alpha \leq 500$	$500 < \alpha$	DK	Total	Average Bride-Price
~1921				1		1		3	5	400
1922~1931		1	7	1					9	178
1932~1941		6	4					1	11	115
1942~1945			1	2	1				4	300
1946~1955			5	1		1		2	9	250
1956~1965			1	2	2				5	310
1966~1971			1	2	2	2	1	1	9	413
DK								1	1	
Total		7	19	9	5	4	1	8	53	M\$ 252

Table 6 Bride-Price for Non-Kin Marriage

year	M\$	$\alpha \leq 100$	$100 < \alpha \leq 200$	$200 < \alpha \leq 300$	$300 < \alpha \leq 400$	$400 < \alpha \leq 500$	$500 < \alpha$	DK	Total	Average Bride-Price
~1921		1	1	1					3	167
1922~1931		2	3	1				1	7	162
1932~1941		2	6			1			9	179
1942~1945		2	2					1	5	150
1946~1955		3	7	1		1	1		13	237
1956~1965		1		3	4	2	1	1	11	341
1966~1971				3	4				8	425
DK								2	2	
Total		11	19	9	8	4	2	5	58	M\$ 256

て恥をかく可能性があること、低目に言うことはコミュニティでの地位の低さを示し恥ずかしいし、高目に言えばお高くとまっていると非難されることになるので、ほぼ真実を言う傾向にある。もちろんマージナルな部分での誤報はあり得るであろう。コミュニティ外でした結婚と

か、古い昔の結婚に関してはその率が高い。

婚姻締結年に関しては、半数は解答者が年代を言い、半数は婚姻年齢を答えたので、調査者がすべて婚姻年次に換算した。両者とも子供の年齢および前後2回の聞き取りによる違いを勘考して修正した。

II. 4. 親族婚は初婚同志の者がする傾向がある。親族婚53例中、再婚のケースは5例(9.5%)に過ぎない。その内訳は次の通りである。

(男)		(女)	
再 婚	×	初 婚	2 例
初 婚	×	再 婚	1 例
三 婚	×	初 婚	1 例
三 婚	×	再 婚	1 例

これに対し非親族婚の例(73例)を見ると、16例(21.9%)が再婚のケースである。この内訳は次の通りである。

(男)		(女)	
再 婚	×	初 婚	3 例
三 婚	×	初 婚	1 例
再 婚	×	再 婚	6 例
三 婚	×	再 婚	4 例
再 婚	×	?	1 例
?	×	再 婚	1 例

さらに離別・死別の違いにおいても、親族婚のほうが離別が少ないことがいえる。イトコ婚23例中には離婚のケースはない。第2イトコ婚15例中に離婚があったのは1例のみである。これら近親婚の中には正式に離婚してはいないが別居中というのが2例見られる。1例は初婚同志であるが出稼ぎに行った夫のほうの遺棄に近く、後に妻側は遺棄の事実をもって離婚を宗教局に申請した。他の1例は再婚者の場合で性格が合わないということで夫は隣のBM村に住み、妻は母親と共にBP村に住んでいる。

Table 7 Divorce and Near-Kin Marriage

Marriage-Partner	Living together	Separated	Divorced	Widowed	Total
First Cousin	11	1	0	11	23
Second Cousin	8	1	1	5	15
Other Relative	12		2	2	16
Non-Kin	43		10	20	73

遠い親族との婚姻，非親族婚をみると離別に終わった割合が多くなる。全婚姻ケース数の13.5%である。これはまた離別に終わったケースと死別に終わったケースとの割合から見られる。近親婚ではほとんどが死別に終わっているのに対し，非近親婚では死別に対する離別の比が54.5%と2：1以上の割合である。もちろんこれらの数字は近親婚の時間的発生状況と対比させて考えるべきで，前掲の Table 3-6 を同時に参照されたい。

II. 5. 結婚後の居住については，まず両者の両親の間を行き来して1週間なり1ヵ月なり半年なりずつを両方で過ごしたい都合の良いほうに居を定める。その後とくに両親の家を譲り受けるのであれば自分の家を建てて独立していく。最初寄寓時代を主に妻方で過ごし，新居は夫方の土地に建てるとか，その逆もある。あるいは妻方に寄寓して，さて夫が妻を連れて帰ろうとすると妻側の拒否にあい，それを理由として離婚した例もある。このように寄寓時代にある婚後の居住は必ずしも両者の力関係を的確に表現しているとは言えない。その事実を踏まえながら婚後の居住を調べてみると，第1イトコ婚の85%，第2イトコ婚の80%，その他の親族婚53.3%，非親族婚62%にあたるケースが妻方居住である。

II. 6. 結婚の話を持ちこんだのは誰で，それを誰が主として決めたか，ということは極めて重要である。近親婚について言えば，婚姻締結時にどの親族が積極的な役割を演じたかという問題である。残念ながらこれに関する具体的なデータは無い。ただ Table 2 の親族のカテゴリーから母方親族を選んでいるほうが，父方親族を選ぶより約3：1の割合で多いことがわかる。（男の場合は70%，女の場合は64.2%が母方親族である。）この場合も結婚の際に祖父母が生きていたか，彼らが重要な役割を演じたかどうか，ということに関するデータは無い。

II. 7. Table 8 は望ましい結婚相手としてどのカテゴリーを選ぶかという質問に対する解答

Table 8 Opinions on Preferable Marriage

Categories of Mate	Age					Total	
	—19	20—29	30—39	40—49	50—		
	m f	m f	m f	m f	m f	m f	
Saudara Dekat (close relative)	1	1 1	1	1	2	5 2	7
Saudara Jauh (distant relative)			1 1		3	4 1	5
Orang Yg Kenal (acquaintance)	1	2 1				3 1	4
Orang Sekampung (villager)		1 1	1 1		1	3 2	5
Orang Lain (Non-Kin)	7 1	8 7	3 5	7	9 1	34 14	48
Tak boleh jawab (No answer)		1			4	5 1	6
Total	9 2	13 10	4 8	9 0	19 1	54 21	75

を年齢別に集計したものである。これは第2次面接調査に基づくものであるが、悉皆調査でもランダム・サンプリングでも無いので調査村を必ずしも代表するとは言えない。数字は単に大まかな傾向を示すものと受け取っていただきたい。

配偶者の適・不適は *jodoh* (生涯の相手・対・男女の仲・適った、適した) ということばで表現される。日本語で言う宿縁・因縁などの予定調和による縁があって2人が結ばれるべくして結ばれたというような似合いの男女を *jodoh* という。この表において答えられないと答えた者の多くは、*jodoh* である限り誰でも配偶者として適当であると答えた者である。一度そのように答えた者に対して、さらに「五つのカテゴリーの中に全部 *jodoh* に当たる者がいればどうするか」と質問してから、解答を得たケースもいる。宗教心の厚いと言われる人ほど、最後まで、*jodoh* であれば誰でも良く、人は場所・相手を問わず *jodoh* を求めるべきだと主張している。(ただしすべての宗教心の厚い者がそうであると言うのではない。) これは *jodoh* というものが予定調和であり神の定めたもう事柄であるから、人の力ではいかんともしがたく、人間が勝手に近親者が良いとか、知己の娘と結婚させたいとかいっても所詮かなわぬことであるからである。

Jodoh に強く固執する解答者と、与えられた五つのカテゴリーから躊躇なく一つを選ぶ解答者との間に、宗教的な関心の相違がありそうだということは注目に値する。しかし後者の場合でも、予定調和の縁を完全に無視するというのではなく、それは前提として答えれば、という事を明言しなかったただけなのかも知れない。

五つのカテゴリーは必ずしも相互排他的ではない。各々のカテゴリーだけをとりあげれば問題は無いが、相互の間の外延をどのように考えるかは解答者にまかした。というよりはこの五つのカテゴリーに対する反問を解答者から受けなかったというほうが正しい。選択肢が客観的には曖昧なので厳密な意味で Table 8 を解釈することは許されない。しかしどのカテゴリーに、より選択的親和関係を感じるかということを知る上には参考になる。近親 (*saudara dekat*) は遠親 (*saudara jauh*) と対立する。両者の境界は状況によって異なるが普通第2イトコが境界となることは前述した。近親者の中に適った (*jodoh*) 者があるのに、わざわざ遠くの人間を選ぶのは、近親をおこらせる (*kechil hati*) ので良くないという。しかし、余り近すぎるより、遠からず近からずの親類と結婚するほうが良いとする者もある。次に述べる親族婚の弊害をある程度避けながら、しかも近親婚の良さを残そうというのである。さらには、「一度遠くなったものをもう一度近くする」ために遠縁の親族婚は良いという。近親・遠親の差はあっても、いずれも親族 (*saudara*) を大事にする為に親族の凝集の必要があるという発想に基づいて、親族紐帯強化の方向に向かう。

他の三つのカテゴリーの各々は上記二つの親族のカテゴリーに対立する。対立する中でももっとも漠然としているのが *orang lain* である。*orang lain* は多義である。親族に対比して

考える者は非親族ととり、知己に対比すれば知りあいでない者、村人に対比すれば村外からの人、自分から見れば他の人、等々、他人、異人、異邦人、そと者などに訳され得る。要するにある枠を作って、その枠に入らない者、枠組の外にいる者を *orang lain* と言うのであるから、枠によって色々と変化していく。面接の場合では *orang lain* は親族でない者を意味し、その中でも特に同一村でなければいけないとか、同一村でなくても知己でなければいけないとか考える者が各々の選択肢を選んだようである。これは選んだ理由を聞くことによって推定される。

親族婚は選ぶ者同様、親族を大事にせねばならないという同じ発想に基づいて、非親族婚を選ぶ。なぜならば、親族婚をして失敗に終われば親族紐帯を破壊してしまう恐れがあるから親族婚は避けて、縁故の無い人と結婚するほうが良いからである。理解の齟齬(*seliseh faham*)などから夫婦間の紛争が起こった場合、夫婦が血縁であると親族内部が二つに分かれて困難な状態になるというこの見解はかなり多くの人に持たれている。逆にいえば、無縁の者だと「嫌いだったら捨てることができる」のである。*orang lain* というカテゴリーを選んだ者の多くはこの意見である。違った理由で *orang lain* を選ぶ者もいる。それは自分の子孫(*zuriat*)をより多くする為であるとする。即ち親族範囲(*persaudaraan*)を通婚によって広げて親族と言える者の数を増やすのである。この理由も、‘*saudara*’が重要であるというマレー人の認識に立脚している点で前者と共通する。しかし、その‘*saudara*’をできるだけ広げて多くするのが「神より与えられた人間の勤めである」とする。

知己(*orang yang kenal*)というカテゴリーを選んだのは2人の小学校教員と11年間の学校教育を終えた青年1人の3人だけである。‘*kenal*’という概念はマレー人の生活一般に重要ではあるが、村落生活のレベルでは「知っていない」者が日常生活の中に入って来るのが少ないので、選択の際に大部分の者は一顧だにしないで終わった。上述の3人の場合は、友人関係を「結婚によって」より深めるというのが理由であるが、かなり都会化した人間でないと選べないカテゴリーでもある。

同一村内の者という解答も少数派である。少なくとも地域的近接さを結婚の第1条件と答えるものは少ない。遠い親族を選んだ者の中に、文字通り「遠い」を距離関係⁷⁾にとって婚姻相手の家を訪問する際に「遠くへ旅行できるから」と答えたケース(女性)もある。しかし近くにいることはお互いの助け合いにも都合が良いし、気心も知れあっているというメリットがあると言う。「近親」が好ましいと答えた者の理由の中にも「病気の時などすぐ呼び易いから」と地理的距離を暗に示しているケースもある。また結婚式とか結婚後の双方の往来にも近いと便利であるが、遠いと費用も多くかかり貧乏人にとって困難であるという意見もある。中には、

7) 空間的概念を人間関係、時間関係等を表わすために使うことはマレー語でも珍しくない。

はっきりと「近くに住んでいる遠縁の者」が良いと答えた者もある。

II. 8. このような配偶者選択にあたって地理的近接さを促進する特異な自然的・社会的条件はない。I. 2. で述べたごとく、集落形態は普通のマラヤにおけるリボン状集落（列村ないしは街村）と異なり、塊村となっている。⁸⁾ この為、集落内での接触がより頻繁になり均一化される傾向は考えられる。しかしそれゆえに排他的になるということは、村内および村外の人々からの聞き取り・観察から見て存在していない。生活水準、階層、生業などからも本村を特に他から区別するものは見られない。

それにもかかわらず村内婚の実数の多い。Table 9 は現在 BP 村に居住する者の婚姻相

Table 9 Origin of Spouses (BP)

		WIFE								Total
		BP	BM	PN	BK	TM	Within 10km	Melaka	Other	
HUSBAND	BP	59 (21)	3 (3)	7	5 (1)	1	8	2	1	86 (25)
	BM	5 (1)	1							6 (1)
	PN	4 (4)								4 (4)
	BK	1 (1)								1 (1)
	TM	7 (1)				1 (1)			1 (1)	9 (3)
	Within 10km	9								9
	Melaka	3								3
	Other	4				1			1	6
Total		92 (28)	4 (3)	7	5 (1)	3 (1)	8	2	3 (1)	124 (34)

Note : () : Number of First- and Second-Cousin Marriage

BP : Bukit Pegoh
BM : Bukit Meta
BK : Bukit Kechil
TM : Telok Mas
PN : Pernu

手の出身地を示したものである。() 内の数字は近親婚（第1および第2イトコ婚）の数を示す。BM, PN, BK, TM は隣接する周辺の村落である。この隣村集落を含めた範囲内での内婚率は73.9%である。10km 以内の範囲に広げると、91.6%がこの範囲内で配偶者を得ている。BP 村だけでの村内婚（内婚率49.6%）の内35.6%が、周辺村落を含めた内婚ケースの内33.3%が近親婚ということになる。⁹⁾ 近親者の村外における分散度というものが知られないと正確なことは言えないが、近村を越えた所に近親婚が見られないというのは、特に近親婚を求めているのではないということの消極的証拠の一つであるかも知れない。

8) マラヤにおいても、主たる列村から離れた小村（Weiler）は見られるが、BP のようにいわば環状に屋敷地が集まった例は少ない。

9) 夫婦双方とも別の村出身で、現在BP村に住む者を除外した。

II. 9. BP村では土地所有よりも現金収入の多寡のほうが経済的に重要である。いま仮に米作収入（自己消費分）を除いた現金収入と近親婚との相関をみてみると Table 10 のようにな

Table 10 Near-Kin Marriage and Cash Income

Cash income per annum Spouse (M\$)	1st Cousin	2nd Cousin	Other Relative	Non-Kin	Unknown	Total
$\alpha \leq 500$	9	5	2	23	1	40
$500 < \alpha \leq 1000$	4	5	3	19	2	33
$1000 < \alpha \leq 1500$	3	2	6	9	2	22
$1500 < \alpha \leq 2000$	2	1		6	1	10
$2000 < \alpha \leq 2500$	1		1	3	1	6
$2500 < \alpha \leq 3000$			1	2		3
$\alpha > 3000$	1		2	6		9
Total	20	13	15	68	7	123

る。各収入層の中での近親婚（第1および第2イトコ婚）の占める比率は500ドル以下が35.9%，以下順次収入が多くなるにつれて，29%，25%，30%，16.7%，0%，11.1%と減少の傾向が一応みられる。しかし非親族婚の割合は各収入層を通じて45～67%の間を前後して，一定の傾向は見られない。

この表の最大の欠点は結婚締結時における各世帯の富力を示していないことである。まず現金収入による階層区分に対する疑問と，第2に家族周期によって生ずる現金収入の波が非常に大きいこと，第3にゴム価格の変動が富力の浮沈を大きく左右したこと，などを考えると本表は単なる参考程度の資料にとどまるものであることを付言しておきたい。

III 中間考察

以上のデータはBP村のイトコ婚をいろいろな角度から見たものである。しかしイトコ婚を説明するすべてのデータを網羅しているわけではない。親族の地理的分布，入村・出村と土地所有の有無の関係，一度婚出していった先の親族から逆に婚入してくるというようなサイクルも考えなければならない。これらの欠陥を念頭に置きながら，近親婚の構成契機をまとめておきたい。

どのような親族（saudara）を選ぶかということは，質問・聞き取りによってはっきりしない場合も，統計的には明確になることもある。Table 2を見ると，平行イトコ，交差イトコの区別は見られない。交差，平行という現象より，双系的親族組織においては“linking relative”が重要となってくる。配偶者が父方の親族か母方の親族かという差異は第2イトコ婚ではない。第1イトコ婚では，母方イトコ婚16に対し，父方イトコ婚は4とかなりの差を示している。これを逆に妻の立場から見た場合も，母方イトコ婚11，父方イトコ婚9と，母方のほうが多い。

さらに II. 6. で述べた様に婚姻締結に重要な役割を占める両親の世代では、第1, 第2イトコ婚とも母方親族を選ぶほうが多い。言い換えれば、統計的データで見る限り、linking relatives に女性が現われてくる頻度は非常に高い。反対に FBD 婚のように linking relatives が男同志というのは極めて低い頻度数である。また II. 5. において触れたように、妻方居住制が親族婚の場合多い傾向が見られる。これらのことから、配偶者選択の際の母、オバ、あるいは祖母の役割が注目されねばならない。表立って結婚を取り仕切るのは男性である。しかし実際には女親の発言が大きくものを言う。筆者滞在中に進行中であった結婚話2ケースとも、母親の“no”でもって挫折している。男親は、女というものは日頃の恨みつらみが高じて感情的に走り易いからだと説明する。この説明の妥当性はともかく、母、祖母の積極的な賛同がなければ結婚は難しくなる。逆に言えば母、祖母などの御眼鏡にかなった配偶者はうまく行くということである。ところが、女性の社交圏、接触範囲は極めて限られている。出稼ぎや宗教教育を受けるために広く移動する男性と違って女性はいつも村に残り、村外に出ることは少ない。日常生活においても、日々の食料を買いに市場に行くのは男性の仕事である。このイスラーム社会における女性の定着性 (cf. Wilder 1970) と配偶者選択の際の女性の発言力の強さ¹⁰⁾ とが相まって、配偶者の適格範囲が親族、村などの範囲にしか及ばなくなる。

かくして、近親婚は、歴史的な詮索は別として、現在では地理的・社会的「近接」ということに意義が見出されている (Ⅱの3, 7, 8項参照)。十分相手方の背景を知っていて、未知の人間でないということが配偶者選択の必須の条件となる。近親婚の動機は未知のものへの恐れ、日常接触のないものへの不安ということが出来る。意見調査で orang lain と答えた者が多かったのは、あくまでも意識し反省された意見として多いのであって、実際に今後非親族婚ばかりになるとは限らない。

それでは、なぜ BP 村において近親婚の頻度が高いのかということが問題になってくる。この間に答える為には BP 村のデータだけでは十分でない。他の地域の資料との比較が必要である。以下Ⅳ節において入手可能な資料を比較検討したい。比較の対象は、最後のプギス人を除いて、マレー半島に住むマレー農民に限定した。それによって比較から生じる誤謬を避け得ると考えるからである。イスラーム文化圏におけるイトコ婚の問題 (cf. Korson 1971), 日本, イギリス, アメリカのような社会での近親婚の問題 (cf. 有賀1968; Firth, *et al.* 1969; Farber 1971), 単系親族組織を有する文化圏のイトコ婚 (cf. Lévi-Strauss 1949; Homans & Schneider 1955; 甲田1972) との比較などについては本稿では取りあげない。

Ⅳ 比 較

IV. 1. BP 村の隣村 BM は、村落発展の歴史上、また多くの親族関係が BP-BM 間にあると

10) この際の女性の発言力の強さは経済的な条件に関係しない。婚後の家庭内での人間関係に女性は要の役割を果たすという認識から、男親だけでは決められないのである。普通、男親のほうは、女同志の間に葛藤があっても表面的には中間者としての態度をとる。

ということからも、BP と関係が深い。ただ BP と異なり、BM は TM から村域が延長する形で発展してきた典型的なマラヤタイプのリボン状集落（列村）である。BP のように幹線道路から断絶した形態ではなく、幹線道路から内陸に延びる道沿いに集落が発展している。生業、人口などの点でも BP との違いはほとんどない。

この BM における近親婚の頻度を見ると Table 11 のようになる。BM の世帯数は62でそ

Table 11 Kin Category of Wives in BM

First-Cousin	MZD	3	
	MBD	1	
	FBD	1	
	Total		5
Second-Cousin	MZSD	1	
	MMBSD	1	
	FXXSD	1	
	Total		3
Distantly related			5
	WZ		1
Non-Kin			48
Total			62

の内7ケースは時間の都合で面接調査ができなかった。BP と比べて近親婚の割合は低い。第1イトコ婚8.1%，近親婚12.9%，親族婚22.5%となる。非親族婚が BP より1.5倍ほど多い。数が少なすぎるので詳しい内容を BP と比較できないが、イトコ婚の出現パターンはほぼ同様で、第1イトコ婚のほうが第2イトコ婚より多い。

村内婚は Table 12 に示した。BM 内での内婚は34.9%と BP (47.6%) よりやや低目であ

Table 12 Origin of Spouses in BM

		WIFE							Total
		BM	BL	BP	TM	Within 10km	Melaka	Other	
HUSBAND	BM	22	4	4	6	3	1	3	43
	BL	2							2
	BP	6							6
	TM	4			1				5
	Within 10km	3			1	1			5
	Melaka				1				1
	Other	1							1
Total		38	4	4	9	4	1	3	63

る。しかし隣村の BL, BP, TM をとると, BM 出身の男の83.7%が, BM 出身の女の89.5%がこの範囲から配偶者を得ている。BP では男87.2%, 女82.6%の内婚率であるから, この範囲ではほぼ同じ内婚率を示しているとはいえ, 男と女との各々の割合は逆になっている。

IV. 2. BM においては意見調査をしていないが, マラカ市部においてマレー人を対象に数ケース BP と同じ質問票によって面接を行なった。¹¹⁾ ここでは例外なく結婚相手のカテゴリーとして “orang lain” を選んだ。(既婚4名はすべて非親族婚であり, その内2名が村内からの配偶者を得ている。) 夫婦間に争いが生じると, 各々の両親にそれが波及していき, 争いが複雑になって親族間の仲違いを呼ぶ, というのがほとんどの者のあげた理由である。例外的な理由としては, 22才未婚の青年は親族関係を増やす為と答え, 27才未婚の高等学校教師はスリルがあるからと答えている。24才未婚の青年は, orang lain だところち側のバックグラウンドを知られないから, と答えている。これらは, 村落に住む者が知り合っている所にしか安心感を満たせないのに対し, 未知のものに対する好奇心が前面に押し出されているといえる。

IV. 3. マレー半島西海岸の米所ケダー州パダンラン村(世帯数184)では親族婚率24.5%, 村内婚率22%である。¹²⁾ 口羽による配偶者の親族カテゴリーの詳細は別表 Table 13 の通りで

Table 13 Kin Category of Wives in Padang Lalang, Kedah
(by Kuchiba, Masuo)

First-Cousin	MBD	6
	MZD	6
	FBD	4
	FZD	8
	Total	24
Second-Cousin		7
Other Relative		18
Non-Kin		151
Unknown		27
Total		227

ある。親族婚率全体としては BM 村同様低い, 親族婚の内容については次項でのべるクラントンよりは BP 村に近いパターンを示している。第1イトコ婚の中で BP 村と異なるのは, 男から見た時, 父方・母方イトコ婚が同数であり, MZD 婚が低く FBD 婚が多いことである。“linking relative” としての女性の重要さが低いのか, あるいは同一屋敷地に住む世帯群が男系的であるのか, 詳らかにしない。なお, 村内婚のうち親族婚は38%で, これも BP 村と傾向

11) マラカの高等学校教員 Jaafar bin Hj Kamis 氏の協力によって, パイロット・サーベ的に7ケース面接調査した。すべて男子で, 年齢は56, 50, 43, 27, 27, 24, 22才である。既婚者は4名, 未婚者は3名である。

12) 口羽益夫教授の御好意により, 未公表の調査データを使用させて頂く。

を同じくする (II. 8. 参照)。

IV. 4. マレー人の婚姻・離婚について詳しい報告をしているのは、シンガポールのマレー人を研究した Djamour (1959) がある。彼女によれば結婚の好まれる相手は次の三つの範囲である (*ibid.*: 68ff.)。 (1) 文化的・言語的・地域的に同じ集団。 (2) 親族集団 (the group of kindred)。 (3) 同じ程度の収入、生活水準の家族。

この三つの適格規準のうち、親族集団内の結婚はもちろんイスラーム法により禁止されている範囲を除くが、その他に慣習上の規則もある。一つは FBD 婚が避けられ、MBD, FZD, MZD など尊属親に女性の入っている結婚が好まれる。ただし、第1イトコと第2、第3イトコ (この場合も尊属親が男である場合を除く) とはどちらがより好まれるということはない。しかし、親族婚の大多数は第1イトコより遠い親族である (*ibid.*: 33)。もう一つの慣習上の規制は、異世代婚は避けられる傾向にあるということである。

彼女は実際の婚姻データに基づいてではなく、聞き取りによって叙述しているので数字を比較することはできない。しかし FBD 婚を避ける理由として村人があげた答は興味がある。それは、FBD 婚はイスラームでは許される (sah) が、男の間の争いというものは男と女あるいは女と女との間のより大きくなり易いからであるという (*ibid.*: 69)。これは2面に解釈できる。兄弟紐帯が大切であるから万一を慮ってそれを壊すような結合を避けるという解釈がその一つである。あるいは兄弟紐帯は姉妹・兄妹紐帯よりもともと壊れ易いものだから、子供の間のちょっとした行き違いによっても兄弟関係がうまく行かないという理由であるとも解釈できる。

BP では統計的には FBD 婚が1件で明らかに頻度が低い。意識的に FBD 婚というものを避けるべきであるという意見は聞かれなかった。さらに一世代上の親族婚には FBD 婚が多くなる。

IV. 5. クラントン (Kelantan) のパシルプテ (Pasir Puteh) で調査した Downs はクラントンマレーの配偶者選択について次のように述べる (1967: 139f.)。第1イトコはあまりにも近いし、第3イトコは遠すぎて、理想的なのはイトコの中でも第2イトコである。イトコ婚を好む理由は家族の財産の分散を防ぐことにあり、昔はもっと多かったと言われる。Downs の調査では154組の内、12組が第1から第3までのイトコで、3組が遠い親族同志であるという。イトコ婚率は7.8%である。しかも婚姻歴全部を数えるとイトコ婚の割合が7%弱に下がり、昔はイトコ婚が多かったという情報に反すると Downs は述べる。イトコ婚の中では第2イトコ婚が第1イトコ婚の倍あり、第3イトコ婚は第3位の頻度である。シンガポールにおけるような FBD 婚に対する反対意見は聞かれず、その頻度も他のイトコ婚よりわずかに多いくらいであるという。

「特に望まれる」相手と報告されている割には、イトコ婚の頻度が意外に少ない。第1イト

コ婚と第2イトコ婚との割合は、BP とは逆である。

Downs の調査した村 (Jeram) では約2%が村内婚である (*ibid.*:140)。これは BP とほぼ同じである。Jeram 以外の村では特に好まれている村というのは無く、配偶者の出身地は地理的にほぼ平均しているという。そして Downs はこのような Jeram 村を「横に広がった deme」 (*ibid.*:146) と特徴づけ、マレーの社会組織をつらぬく原理は、(1)村落共同体における居住と、(2)双系的親族関係の認知の二つであると結論づけている (*ibid.*:147)。

BP の親族婚率は Jeram よりはるかに高く、村内婚率もほぼ同程度であるから、Downs に従えば“deme”と言うべきかも知れないが、少なくとも現今のマレーの村落は地縁関係が主であって、決して親族集団とは見なされないと筆者は考える。“deme”のような単なる分類の為にラベルを採用して混乱を呼ぶことは避けたい。また彼の言う二つの原理も、単に地縁と血縁とを指摘しただけにすぎない。

同じクランタンを調査した Rosemary Firth (1966) は、戦前に比べて女子の意見が配偶者選択に関してより重視されてきていることを指摘しているが、配偶者のカテゴリーについては言及していない。坪内の調査したパシルマス (Pasir Mas) の Galok (146世帯) では第1イトコ婚率3.4%、第2イトコ婚率6.5%、親族婚率15.4%であり、Downs の調査した Jeram よりイトコ婚率は高い。¹³⁾ しかし第1イトコ婚と第2イトコ婚との割合は Downs のデータの割合と同じである。Galok でもやはり少し遠い近親が選ばれると見てよい。集落内婚に関しては、近くのお集落をも含めた近距離婚が好まれるという (坪内1972: 395)。Galok 居住者同志の婚姻率は25.4%、隣接集落内の通婚率は56.5%にのぼる (*op. cit.*)。

IV. 6. クランタンの北部に連なるタイ国領マレー・ムスリム・コミュニティに関しては、矢野1970, Fraser 1966, Annandale 1907 などの報告が見られる。矢野は親による配偶者選択の際に考慮される条件は、(1)富＝土地所有、(2)学識、(3)性格などの常識的判断に加えて「相手の家族との交際の容易さ (sangkhom kan dai dii)」という条件をあげている (矢野1970: 466)。後者は矢野によれば「地理的距離」のことで、とくに村内婚が好まれる。村内婚率は約75.6%である。イトコ婚は忌避されていないというが、「遠隔拡大家族」の問題とあわせてイトコ婚の分布は公表されていない。上記の条件のうち、気安い交際を望む点は BP でも重要である。

矢野の調査地より南部の Pattani に近い村落 Rusembilan を調査した Fraser によると、良き嫁とは「美しさ、良い家族背景、富、世俗的・宗教的教育」のいずれかを有していなければならない (Fraser 1960: 305)。同地域の20世紀初頭におけるマレー人の慣習について Annandale は、第1イトコ婚は禁止されているが (1907: 72)、親族 (families, *kaum*) 内婚であるという (*ibid.*: 74)。

Annandale と矢野との第1イトコ婚の忌避に関する対立は、時代差か地域差か、あるいは

13) 坪内1972の論文の表3「結婚相手との親族関係」より筆者が算出した。

Annandale の誤りかどうか不明である。クランタンにおける第1イトコ婚率の低さをも併せ考えれば、マレー半島東北地域においては第1イトコ婚より第2イトコ婚のほうが好まれる傾向があるといえる。

矢野・Fraser とともに配偶者となるべき者の個人的な性質、家族の財産などが選択の際の第一義的な条件のように記述されているのは注目に値する。Annandale の時代には親族内婚であったのが、現在では配偶者の属性が強調されて、親族婚がとりたてて注目されるほど発生していないのかも知れない。性質、財産、教育といっても、同じ程度のものでなければならないのか、上であればあるほど良いのか、によって通婚の範囲も変わってくる。次に引用するジョホル (Johor) 州のマレー人に関する資料はこれらのことを積極的に語ってくれる。

IV. 7. ジョホル西岸のマレー人世帯41 (約250人)、インドおよび中国人の家や店が25ある集落を1955年に K. O. L. Burrridge が調査している (Burrridge 1956)。彼はこの村での男系親族集団の存在を指摘する。政治力、土地所有から見た富力などがこの男系親族集団と密接に結びついて配分されている。中心的な男系親族集団 (ブギス出自) 内部では「相互的なイトコ婚」 (*ibid.*: 63) が見られる。他の貧しい男系親族集団では選好的な婚姻は必ずしも権力、富、出自と関係しない。できれば、単なるイトコ婚よりは、より影響力のある家の娘との結婚、より得な結婚を選ぶ (*ibid.*: 66-67)。

村内の上層階級は親族と結びついた階級内婚を、下層階級は親族の範囲を越えてできるだけ上昇の機会に恵まれる通婚を求める。これに対し、BP 村では Burrridge の調査村のごとく画然とした男系親族集団が見られないばかりではなく、集落の構成要素が Burrridge の村より同質的である。富力に関しても、出稼ぎによる現金収入が、富の巨大な蓄積を許さぬ限度において、各世帯の生計を支え、一時的な上昇・下降の現象をもたらせる。均分相続と相まって富裕階級というものが世代を越えて存続していくことは難しく、常に富裕な者の交代周流が見られる。土地財産が少ない者の間にも BP ではイトコ婚が見られ、階級内婚という結論を引き出すには躊躇する。

同じ西海岸ジョホルの一村落を調査した Syed Husin は「普通 [両親によって選ばれる] 嫁は親類かあるいは同じ地位 (status position) に属するものである」 (1964: 85) という。地主、政府吏員、教員などの間で顕著に見られる通婚傾向を、村人は “Enggang sama enggang, dan pipit sama pipit pula.” (犀鳥は犀鳥と、雀は雀と) という諺を引いて説明するという (*op. cit.*)。地主有力者間の「階級」内通婚の例はあげられているが、イトコ婚あるいは親族婚との相関は触れられていない。

IV. 8. 以上マレー半島のマレー人村落調査の資料を検討してみた。このほかにミナンカバウ系の移住民の内婚傾向も指摘される (cf. Wilson 1967: 20; Swift 1965: 113)。しかしミナンカバウ系は母系原理による親族組織が確立しているので本論の比較の対象とはしなかった。

マレー半島全体に、画一的にイトコ婚が好まれるのではないことがまず第1に指摘される。第1イトコあるいはその中の特種なカテゴリーが忌避される地域、第2イトコ婚が好まれる地域、親族婚は問題でなく階層内婚が重視される地域などがある。それらに共通する点は *similia similibus* (類は類を呼ぶ) 原則に基づいていることである。いわば *homogamy* あるいは *assortative mating* というべきものである。釣り合のとれた、あるいは似たもの夫婦であることが理想といえる。多くの点で釣り合いが取ればとれるほど良い。両者の美しさ、両家の金持ちの度合いなどはもちろん、花嫁・花婿の婚台における坐り方など些細な点にいたるまで、婚姻儀礼の過程において共同社会構成員から吟味され広報される。そのサンクションに応える確実な方法は親族内婚や村内婚であった。それは親族をも含めて近隣に住む者の間に階層隔差が比較的小さかったからである。その分化が進めば、血縁・地縁を中心に配偶者選択がなされるのではなく、Ⅲ.7. のようにむしろ階層内婚の様相をおびてき、下層階層の者は通婚による上昇を狙うようになる。

一方では交通網の整備と共に生活関係の範囲が拡大されていく。一般に生活空間の広がりと同婚範囲の広がりとは高い相関を持つと言われる。確かに理想的には親族婚から非親族婚への移動が見られるかも知れない。しかし実際に非親族婚が大多数をしめるためには、広い生活空間を持つ者が配偶者選択の主要人物とならなければならない。BP 村の男の場合は、出稼ぎによって広く世間を見ているので生活空間は広いはずである。しかし、第1節で比喩的に述べたように、その多くは必ず村に帰ってくることを前提としている。不安定な出稼ぎであるが故に、確固とした基地を村に求めるわけである。その上、選択過程は当事者ではなく当事者の尊属親による結婚取り決めによる。従って意見としては非親族婚を望む者が多くても、実際に村にいる配偶者選択の主要人物である尊属親は *similia similibus* の原理に従うことが多くなる。それは、もっと根本的な所で、「不安」の回避ということにつながっている。

理念と現実とのずれを強く促進する要因として離婚がある。¹⁴⁾ 上記の比較資料のいずれにおいてもマレー人の間の「高い」離婚、壊れ易い婚姻関係を指摘している。これに反してマラカ州とくに BP における離婚は極めて低い。Ⅱ.4. に基づいて結婚ケースに対する離婚ケースの割合を求めると10.2%である。さらに離婚経験者は結婚経験者の7.2%である。ケダーでは結婚回数の17.1%、結婚経験者の18.8%が離婚である。¹⁵⁾ さらに多いのはクランタンで結婚回数の42.4%、結婚経験者の37.7%が離婚である(坪内1972:397)。他の比較資料ではコミュニティレベルにおける離婚の確実なデータは得られない。例えば、Downs は離婚と死別とを区別

14) 離婚を社会病理的なものと捉えるドグマはもちろんのこと、例外的なものあるいは家族社会学の枠外にあるもの (cf. 森岡編 1972 は離婚を取り扱っていない) と処理すべきものではないと考える。社会学的には、結合に対する分離であるから、結婚と同じ比重でもって考慮される必要がある (cf. 坪内・坪内 1970)。

15) 注12参照。

していず(1967:143), Fraser, Annandale とともに数字は示さず, Djamour は州レベルのデータしかあげていない。離婚のデータが確実なる地域の比較で明白なことは, 離婚率と親族婚率とが負の相関関係をなしていることである。もちろん, 親族婚が多いので離婚が少ないとも解釈される。しかしここではマレー人の説明すなわち「夫婦の間の争いが親族間に亀裂をもたらすから近親婚を避けるのだ」という説明を受け入れ, 親族婚が良いという理念はある, しかし現実には離婚が多いので折角の親族婚が逆作用するのを恐れて親族婚を避ける, という風にいちおう解しておく。

ただし離婚傾向が単独要因として親族婚を促進させるものではないことは明らかである。BM 村では BP 村より近親婚が少ないにもかかわらず, 離婚率も少ない。離婚経験者5.5%, 離婚回数率7.5%である。BM の場合は離婚が少なくなつて, さらに他の要因が加わつて近親婚を抑制する傾向を生じたものと思われる。しかし BP を除いて, BM だけをケダー, クランタンのデータと比較すれば上記の仮説はいちおう改変を受けずにすむ。

IV. 9. これまでの比較資料によって「なぜ近親婚が好まれるか」という問に対しては, いちおう *similia similibus* の理念が働いているからであると結論づけられた。この理念を促進, 阻害する要因の有無によって近親婚の頻度が異なってくる。その要因の一部として指摘されたのが, 生活空間の拡大, 階層分化, 離婚傾向であった。しかし, 前項の終りに触れたように, これですべて説明されたわけではない。その考察は次節に譲り, 本項では BP 村の特殊な条件として, この村がスラウェシ島 (Sulawesi) のブギス人の子孫であることが近親婚に影響を与えているかどうかを吟味したい。

BP 村の草分けは6世代くらい前にスラウェシから来たブギス人だと言われる。隣村の郷土史家 Hj Mohamad bin Said によれば, 現在 Telok Mas (黄金の入江) と呼ばれる入江に最初のブギス王の一族がムアルを経由して入植してきたのは17世紀である。ともかく, BP 近辺の集落はブギス人が主体となって築いたものらしい。しかし現在では, いわゆる「マレー人」に土着化してしまっていて, むしろ新しいブギス人の入植者は区別される。BP 村のある世帯主 (ハジヌル) は1920年前後に16才で南部スラウェシから移住して来た。結婚の為に呼ばれたもので, マラヤに既に入植していたブギス人の娘の婿となった。この2人は家の中ではブギス

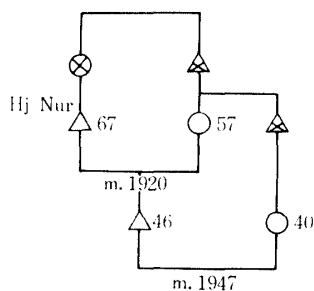


Fig. 3 An Example of Cousin Marriage in BP

語を日常使い, 他人にはマレー語を用いるが, 強いブギス訛のマレー語である。BP 村ではマージナルな存在でしかなく, ハジヌルも, 過去にうけた迫害のせい, 常に遜って村人に接する。ジョホル州のムアルや TM 村の Ketapang などに親類縁者を持ち, それら親族の間で一種独特の内婚関係を結んでいる。Fig. 3 はハジヌルと彼の息子の系図である。この場合, 入植一世 (バジヌルの妻の父親) が辛苦して開拓した

ゴム園の分散を防ぐ為だとの説明がなされた。しかし、このケースがマラヤに來たブギス人の特殊な自己防衛の為の工夫か、あるいはブギス社会に普遍的なものかを見たい。

スラウェシのブギス人に関する適当な資料は未見であるが、ブギスと類似するマカサルの調査をした Chabot (1950, 1967) をここでは引用したい。Bontoramba 地区の調査村で89組の夫婦のうち79組が親族婚である。この内60組が同世代間の通常の婚姻儀礼に基づき、第1イトコ婚は8、第2イトコ婚は30、第3イトコ婚は22である。第4イトコ以上はすでに遠縁すぎて「望ましくない」とされる。最も普通なのは第2・3イトコ婚で、その他はあまり良くないか、不幸になるという。ただし貴族の間では第1、第2イトコ婚がより好まれる (Chabot 1960: 30)。親族婚でないものは、社会的地位を高めるなどの実務的な目的が明確であるという。親族婚が多いのに逆比例して離婚は極めて低い。107の結婚登録数に対して7件の離婚しか見られない (Chabot 1967: 200)。

はっきりした親族集団が存在していること、社会的地位・名誉に非常に敏感である点、Burridge の報告したジョホルの村は Bontoramba に似ている。しかし、マラヤと最も異なるのはブギス・マカサルの社会は階層社会であることと、祖先崇拜が強いということである。このような重要な組織原理が欠如し、またブギス・マカサル人の社会的名誉・地位保全を主な動機とする近親婚傾向は無くなっても、入植者達が比較的隔離された地域で当初親族内婚を繰り返していけば、複雑な階層の壁は無くなって地理的な親族内婚の傾向だけが人口学的に残存し得ることも考えられる。実際の歴史的なコミュニティ形成過程は分からないが、Burridge の調査村のように比較的新しい(3～4世代)入植村では、より多くブギス・マカサルの特徴を残していることを考えると、上述の推定も当たらずとも遠からずといえる。

ただ、再度強調したいのは、先にハジヌルの例で示したように、BP 村の住民にとってブギスというのは遠い過去であり、自分達とは関わりのない世界である。彼らは完全なマレーシアのマレー人であり、インドネシアから來た移民達は、ハジヌルのように、しょせん orang lain なのである。

V 結

「なぜ近親婚が好まれるか」という問に対するⅢおよびⅣ. 8. の結論はお互いに補完的であるといえる。そしてそれはマレーシアの農村に広く見られ、かつまたマレー人の対人関係における平衡関係重視とも関わってくる。¹⁶⁾

村人の主観的な選択規準は、イスラーム法の禁止する(haram)範囲外において、jodoh と saudara 関係という二つが重視される。Jodoh というのは、理念的に言えば、予定調和による

16) A dyadic equilibrium model であって、統一的な全体の均衡を計るという synthetic equilibrium model ではない。集団の統制力、凝集力が弱く、メンバーシップが流動的である現象はこのモデルの相違から説明される。

縁であるから、貧者と富者、富者と富者、村外者と村内者、村内者と村内者、いずれの結合も状況に応じて良しとされる。しかし、現実には、似たもの夫婦、釣り合いのとれたカップルということで、村内婚・近親婚を生み易い素地を概念的に用意していると言える。一方の親族紐帯重視も相反する二つの方向に働き得る。一つは現存する親族関係を婚姻によってよりいっそう強める凝集の過程である。他はより広い親族網を求めて、婚姻によって非親族を親族関係の中に入れていく拡散の過程である。親族紐帯凝集の方法は開拓した土地などの財産保護の為に好んで用いられた。しかし財産の零細化に伴って保護すべき財の価値が低下して、むしろ外部に生計のチャンスを求めるようになると村外婚によって親族網を広げるチャンスを増す傾向にある。この傾向が現われるには、配偶者選択の自由が当事者に与えられていることが条件である。この選択の権限が大幅に尊属親にゆだねられる場合には、依然としてこの尊属親の生活空間の中から配偶者が選ばれていくことになる。

このように、jodoh にしても親族紐帯にしてもマレー人の原理は常に両面価値を著しく前面に押し出してくる。使い方により、状況に応じて、正にも負にも働くのである。状況のすべてを考慮に入れて、うまく平衡関係を保つことがマレー農民にとって至上の掟である。この意味では状況主義で無原則だと解されるが、実際には最も賢く適応していると言える。この村人的な平衡関係が消滅してしまうと、統一的な原理がないので直ちに社会圏の解消になってしまう。これを避ける為に、*lemah lembut*, *tolak angkor* などのような対人関係において柔軟な態度が村落では最重要視されることにもなるのである。

BP 村が諸調査の事例より統計的に村内婚・近親婚の傾向が強い原因の第1に離婚との相関があげられる。Ⅳ.8. では離婚の少なさを親族婚を高める一つの要因として捉えた。しかし、Ⅳ.9. に考察した歴史的過程を考えると、親族婚を余儀なくされたコミュニティが自己保存の為に離婚をできる限り押え、その結果また親族婚が続けられるという、いわば相乗作用に働いたと考えるほうが妥当であろう。

近親婚の多い第2の理由はコミュニティの地理的条件である。これは二つに分け得る。一つは上述の歴史的なコミュニティ形成過程に関わるものである。BP の場合は、集落の歴史が古いので選択範囲内に近親の割合が多くて、確率的に近親婚を選びやすいと考えられる。即ち、当初近親婚でもって村が形成された場合には、他の外的要因によって近親婚のサイクルが意図的に避けられない限り、集落の歴史が古くなるほど、その集落の成員間の親族関係が重複していった、近親婚の出現度が多くなる。他の一つはコミュニティの孤立化の度合である。コミュニケーションの手段、人口の規模、集落形態のいかんによって内婚傾向を促進、阻害する。特に BP 村の場合はⅣ.1. に考察した様に隣村の BM や西マレーシアの一般農村と違って塊村集落である。このことは社会的な接触の頻度や範囲に大きな影響を与える。いわゆる社会的「距離」が地理的な距離と一致していくのである。列村のように境界なく広がっていく集落と

違い、集落の凝集度が地理的に強められるのである。内婚率が高い一つの要因はこの比較的孤立した塊村形態にあると仮説しておきたい。¹⁷⁾

引用文献

- Annandale, Nelson. 1907. *Fasciculi Malayenses*. Pt. II. London.
- 有賀喜左衛門. 1968. 『有賀喜左衛門著作集Ⅳ：婚姻・労働・若者』東京。
- Burridge, K.O.L. 1956. "The Malay Composition of a Village in Johore," *JMBRAS*, 29 : 60-77.
- Chabot, Hendrik T. 1950. *Verwantschap, Stand en Sexe in Zuid-Celebes*. Groningen-Jakarta. (English Translation : 1960 in HRAF)
- 1967. "Bontoramba : A Village of Goa, South Sulawesi," in Koentjaraningrat (ed.) *Villages in Indonesia*, Ithaca, pp. 189-209.
- Djamour, Judith. 1959. *Malay Kinship and Marriage in Singapore*. London.
- Downs, R. 1967. "A Kelantanese Village of Malaya," in J. H. Steward (ed.) *Contemporary Change in Traditional Societies*, Vol. 2, pp. 105-186.
- Farber, Bernard. 1971. *Kinship and Class : A Midwestern Study*. New York.
- Firth, Raymond, Jane Hubert & Anthony Forge. 1969. *Families and Their Relatives : Kinship in a Middle-Class Sector of London*. London.
- Firth, Rosemary. 1966. *Housekeeping among Malay Peasants*. London.
- Fraser, Thomas M., Jr. 1960. *Rusembilan : A Malay Fishing Village in Southern Thailand*. Ithaca.
- Homans, G.C., & David Schneider. 1955. *Marriage, Authority and Final Causes*. New York.
- Husin Ali, Syed. 1964. *Social Stratification in Kampong Bagan*. Singapore.
- Jacobson, Peter, & Adam Matheny. 1963. "Mate Selection in Open Marriage Systems," in John Magey (ed.) *Family and Marriage*, Leiden, pp. 98-123.
- 甲田和衛. 1972. 「インドの婚姻規制」『大阪大学文学部紀要』xvi : 59-160.
- Korson, J. Henry. 1971. "Endogamous Marriage in a Traditional Muslim Society : West Pakistan, A Study in Intergenerational Change," *J. Comp. Family Studies*, 2 : 145-155.
- Lévi-Strauss, Claude. 1949. *Les Structures Elementaires de la Parenté*. Paris.
- 森岡清美編. 1972. 『家族社会学』東京。
- Swift, M. G. 1965. *Malay Peasant Society in Jelebu*. London.
- 坪内良博. 1972. 「東海岸マレー人農民における結婚と離婚」『東南アジア研究』10 : 390-408。
- 坪内良博・坪内玲子. 1970. 『離婚——比較社会学的研究』東京。
- 矢野 暢. 1970. 「南タイにおける通婚圏の形成」『東南アジア研究』7 : 462-491。
- Wilder, William. 1970. "Socialization and Social Structure in a Malay Village," in Philip Mayer (ed.) *Socialization : The Approach from Social Anthropology*, London, pp. 215-268.
- Wilson, Peter J. 1967. *A Malay Village and Malaysia : Social Values and Rural Development*. New Haven.

17) 集落の生活関係については別稿に譲りたい。